



http://kochiot.com
高知県作業療法士会ホームページ

よさこい にゅーす

146

2023.9.20 発行

発行：浅川 英則

編集：森 祐輔

第17回 高知県作業療法学会 優秀賞 受賞者紹介



● 大石 大氏
(高知大学医学部附属病院)

*E-mail: jm-o.dai@kochi-u.ac.jp

3年ぶりの対面開催となり、学長をはじめ実行委員の皆様のご決断と実行力には深く感謝申し上げます。また、座長の労をお取り下さった先生方や会員の皆様とのディスカッションを通して、改めて対面開催の良さを感じました。私は、当院の作製状況から「どのようなサプリメントを優先的に学ぶべきか？」を検討し、発表させていただきました。受賞への驚きと同時に、多様な技術を共有する場としての学会の意義を感じられました。

当院では手外科医師とセラピストの研鑽を目的とした『高知県ハンドセラピー懇話会』のオンライン開催や現職者の研修受け入れに加え、スプリントセミナーの企画も行ってまいります。興味のある方は是非、メールアドレスまでご連絡下さい。

今後も当院から様々な知見を発信し、皆様の臨床に寄与できるように取り組んでいきますのでよろしくお願い致します。



● 横山 英里氏
(近森リハビリテーション病院)

初めての学会発表で、優秀賞を受賞することができ、とても嬉しく思います。この発表を通して回復期における生活動作獲得の重要性を再確認することが出来ました。身体機能だけではなく、高次脳機能障害との関わりを考察していく中で、まだまだ疑問点が残る箇所もあるので、これからの臨床場面でも継続的に学びを深めていきたいと思っています。

今回の発表を機に、リハビリテーションを行う上で、患者様の生活の質を高めていくとともに、専門知識や技術の向上に努め、より包括的な支援を行えるよう目指していきます。

また、お忙しい中ご指導頂きました先生方には心より感謝申し上げます。今後も日々勉強しながら、患者様に寄り添えるような作業療法士を目指していきたいと思っております。



● 吉村 大輔氏
(国立病院機構高知病院)

対面・オンライン形式によるハイブリッド開催となりましたが、運営スタッフのご支援もあり、滞りなく進行されておりました。発表演題も急性期から在宅、身体から精神領域まで多岐に渡り、基調講演、シンポジウムに関してもリハビリテーションの垣根を超えた障害福祉への関わりや、コロナ禍での人とのつながりの重要性など、大変多くの学びがありました。

私自身、本学会では鏡視下腱板断裂修復術とリバーズ型人工肩関節術後の上肢機能について報告し、恐縮ではございますが学会表彰に選出頂き、大変実りのある学会となりました。

急性期医療に従事する上で、作業療法の有用性や専門性については、未だ不確定な点も多く、急性期より生活者の視点を持ち、対象者様を支えるとともに、臨床に還元できるように今後も研鑽に励んでいきたいと思っております。

改めまして、本学会の開催にあたり、ご尽力されました小野学会長をはじめ、事務局様に感謝を申し上げます。

(順不同)

よさこいにゅーすの発刊を継続いたします。

昨年度、よさこいにゅーすの発刊終了をお知らせしましたが、会員の皆様へ情報を発信している士会ホームページの閲覧数が少ない現状もあり、引き続き発刊することを決定いたしました。今年度もQRコードを活用し、士会ホームページと連動した刊行物として作成していきます。ページ内のQRコードを読み取り、是非ともご覧ください。

過去の記事は、**士会ホームページの広報編集部特集記事のバナーより、一覧を見ることができます。**



広報編集部特集記事のバナーをクリック

今後もより良い情報を皆様へ発信できるよう、編集部員一同、取り組んでまいります。これからも、よさこいにゅーすをよろしくお願いたします (^o^)

過去の特集記事が閲覧できます!

広報編集部	
2023年2月13日	広報編集部 戦略部イベント
2023年2月13日	広報編集部 濱田氏取材
2023年2月13日	広報編集部 伴川氏取材
2023年2月13日	広報編集部 弘田氏取材
2023年2月13日	広報編集部

高知県作業療法士会 LINE 公式アカウント



士会からのお知らせや研修会のご案内をしています。URLを添付しているので、LINEから研修会の登録ができて、とっても便利です。目指せ全員登録!!

現在のLINE登録者数 **482名**
会員数 **734名** (令和5年8月末現在)

3年ぶりに第17回高知県作業療法学会が開催され、取材に伺いました。

●日時：令和5年6月24日(土)
●会場：土佐リハビリテーションカレッジ



～ 学会長 小野 裕正 氏 (だいいちリハビリテーション病院) より ～

まずは、**3年ぶり**に開催できたことが一番の喜びです。当日は、会場70名、オンライン32名の方にご参加いただきました。**ハイブリッド形式**での開催であったこともあり、遠方の方々や、ご多忙の中、時間を割いて参加して下さる方も多く見受けられました。基調講演では、コロナ禍で更に地域における人とのつながりが重要であること、支援者としての立場ではなく、住民の一人として行動することが大切であることご教授いただきました。また、シンポジウムでは、各分野とも人とのつながりや関わりが少なくなったことが、対象者の方々に多くの影響を及ぼしており、ディスカッションの時には今後のウィズコロナの対応について様々な意見交換ができたと感じました。口述発表においては、**オンライン**を含め23演題の発表があり、活発な意見交換が行われました。

令和5年5月中旬より新型コロナウイルスは、5類感染症へ移行となりましたが、会員の皆様の中には、不安を抱え業務に従事されている方や、貴重な余暇時間などを制限されている方も多くいらっしゃると思います。今後も当学会や研修会などを通じて、様々な職域の皆様とのつながりを作り、更に当学会のつながりを確固たるものにしていきましょう。

取材の感想

私自身、今回の学会に参加し、久しぶりに先輩方や同期と顔を合わせ、楽しい時間を過ごすことができました。また、各現場でご活躍されている方々の発表を聞き、自己研鑽に努める必要性を感じました。学会長の小野氏とは、以前からお話をする機会があり、後輩の私にも気軽に話しかけてくれるなど、人柄の良さを非常に感じてい

ました。取材を行い、「3年ぶりに開催できたことが一番の喜びです。」と聞かれるなど、小野氏だったからこそ、人とのつながりを重要視した学会を開催して下さったのだと感じました。第18回高知県作業療法学会もとても楽しみにしています(〇)

取材・文責／広報編集部 田上 大祐 (仁淀病院)

● **取り組みと結果**

【取り組み】
① 体重減少を目的に食事内容の見直し
② 心肺機能向上目的のインターバルや坂道トレーニング、耐久性向上目的の Long Slow Distance の実施

【結果】
1時間40分で完走し目標を達成。しかし、10km以降はペースが落ち、足底筋膜炎発症。

● **評価・目標**

【初回評価】
2kmを20分かけて走り足底の疼痛が出現。有酸素運動の不足や肥満体型による足底筋への過負荷が影響。

【目標設定】
① 途中で歩かない
② 2時間以内の完走



自身の生活と作業療法
～14kmの市民マラソンに向けた3ヶ月の取り組み～
広報編集部員 大坪 尚喜氏 (朝倉病院)



● 学んだこと ●

新たに目標を設定し、取り組みを継続したことで、2年後にはフルマラソンを4時間38分で完走することができるようになりました。仲間の存在、目標設定、実践後の結果を明確にしないと継続が難しいことを改めて実感しました。そして、対象者様と関わる際には、精神面からサポートできるように心がけ、目的を説明して目標を明確化し、変化したことを対象者様に実感してもらうことを心がけて治療を行っています。

他者を知るには自身のことも知る必要があるのではないかと思います。自身を評価することで、治療の幅を広げるきっかけになるのかもしれない。

地域ケア会議には作業療法士が必要！

～ 主任ケアマネジャーへ直接取材 ～



郷久保 雄介氏 (久病院)
地域ケア会議班
教えてもらいました！
取り組むべきことを

安部 朋宏氏
高知市役所健康福祉部
基幹型地域包括支援センター
主任介護支援専門員
地域ケア会議には
OTが必要なんです！

作業療法士からの助言の重要性

作業療法士の方々からは、活動や参加に焦点を当て、課題点の工程分析を詳細に行い、解決に向けての支援内容や、疾病に対する予後予測などの助言をいただいています。それにより、ケアマネジャーや関連事業所は、在宅での支援内容が明確になるとともに、今後の生活機能を評価する上で、重要な視点などの把握が行いやすくなり、今後の取り組みにも繋がっています。

参考になった助言内容

運動強度 (METs) を用いて、日々行う生活動作が、どの程度の運動量や歩数に相当しているか助言していただいたことが印象に残っています。ケアマネジャーの新たな知識となり、利用者様や家族様へ日々の生活動作がいかに重要であるのか説明も行きやすくなりました。また、自立支援に向けて、より具体的な支援内容や目標設定などが、ケアプラン作成時に反映されていると感じています。

地域課題解決に向けての取り組み

高知市では訪問・通所 B 型サービスや訪問 C 型サービスなどを積極的に行っています。B 型サービスは住民主体型であり、訪問 B 型サービスは、例えば電球の交換など、住民同士での助け合いで成り立っています。通所 B 型サービスは、住み慣れた地域で、利用時間の制約を設けず、気軽に來ていただき、体操や他者交流などのサービスを提供しています。訪問 C 型サービスは短期集中予防サービスであり、自立支援に向けて、生活課題や必要な社会資源の検討が明確に行えるようになりました。介護給付事業のみでなく、住民の方々の相互な支えにより、皆が元気で過ごせるように、インフォーマルな支援内容も積極的に提案を行っています。最近では、限られた地域ではありますが、地元のスーパーと介護事業所が連携して「買いもってりハ」という通所 A 型サービスの支援も行っています。送迎支援のみではなく、買い物やイートインコーナーなどを活用して、体調確認や体操などを行う取り組みです。

下記の取材内容はHPへ全文掲載しています。病院・介護分野で働いている会員の皆様にも、非常に重要な内容になっています！

- 今後も求める助言内容
- 作業療法士へのメッセージ～医療・介護・行政間の連携に関して～

取材・文責／広報編集部 田上 大祐 (仁淀病院)

